

備陽史探訪の会 12月徒歩例会 2003年12月7日

# 初冬の加茂谷に先人の夢を追う

講師 田口義之会長



## 備陽史探訪の会

## スケジュール

- 9時30分 駅前発【中国バス加茂行乗車】
- 10時 粟根バス停着
- 10時15分井伏鱒二生家
- 10時30分窪田次郎生家跡
- 11時 加茂神社
- 11時40分猪子古墳
- 12時 倉神社（昼食）
- 13時 同上発
- 14時 石鎚山古墳
- 15時 正戸山城跡
- 16時30分万能倉駅着解散

【電車は16時41分発福山行に乗車の予定】

☆ゴミは自分で持ちかえりましょう

## 尾ノ上古墳

- ①調査地福山市加茂町字粟根字尾ノ上263-1
- ②調査面積500m
- ③調査期間1999年5月28日(金)～6月15日(火)
- ④経過1999年3月10日付で、佐藤土木(株)(開発業者)から真砂土採集場開発事業に伴い協議があり、3月23日に試掘調査依頼書が提出された。3月25日に試掘調査を実施した結果、丘陵上で古墳の墳丘と葺石を検出し、墳丘部から埴輪片・土器片などの遺物が出土した。また、墳頂部から鏡片・勾玉・管玉・ガラス小玉が出土した。これを受けて開発業者から5月10日付で発掘調査依頼書が提出された。市教委は、「福山市埋蔵文化財発掘調査団」を編成し、開発業者と委託契約を締結し、調査を実施した。
- ⑤調査結果 尾ノ上古墳は、加茂谷を南に見渡す丘陵上に造られた古墳で、西にのびる丘陵を掘り切って尾根と墳丘が区画されていた。調査では、古墳の形や大きさなどを確認するため、古墳の東側、北側、北西側にトレンチを設定

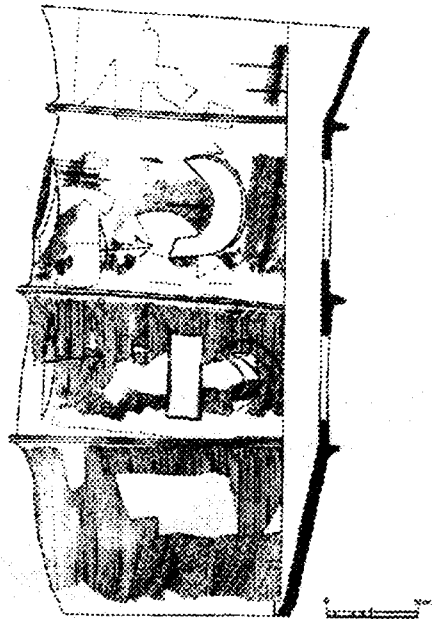
した。

東トレンチ 墳丘の裾が円形にめぐり、3段に築かれた墳丘とテラス、そして1・2段目の墳丘斜面に貼りつけた葺石を確認した。また1段目テラスの上で、壺形埴輪が出土した。

北トレンチ 墳丘の裾が円形にめぐり、1・2段目の墳丘とテラス、そして葺石を確認した。

北西トレンチ 墳丘の裾や3段に築かれた墳丘とテラス、そしてそれぞれの墳丘斜面で、葺石を確認した。また、2段目のテラスでは、円筒埴輪の基底部とその破片、朝顔形埴輪の破片などが多量に出土した。墳丘の裾は、円形にめぐった後、屈折して直線状にのび、「く」の字状にくびれていた。

北西トレンチでくびれ部が確認されたことから、墳形は東西に主軸をもつ前方後円墳と判断した。規模は、古墳の裾から復元して、後円部の径33m、高さ5mの大きさであったと考えられた。前方部については、すでに壊されていたため不明であるが、長さ30m前後と推定される。



以上のことから、かつては後円部3段、前方部2段、全長60m前後の前方後円墳であったと考えられる。

#### 葺石

どのトレンチでも、墳丘斜面で葺石が確認された。墳丘裾の基底石には、30cm前後の比較的大きめの石材を据え、順次上部に積み上げていた。石材はすべて河原石で、青緑色系の石材（泥岩）が多くつかわれていた。葺石の上部はかなり崩れ落ちていたが、崩れ落ちた葺石の量からみると、

かつては墳丘斜面全体に葺かれていたことが考えられた。壺形埴輪は、口縁が朝顔状に大きくひらき、胴部は球形をした壺形である。多少の大小はあるが、径25cm、高さ40cm前後である。後円部と前方部の境となるくびれ部のテラス付近では、円筒埴輪の基底部が検出された。また、この周辺から円筒埴輪や朝顔形埴輪の破片が多数出土した。

#### 埋葬施設

後円部上面は、後世に墓地となっていたため、かなり深くまで攪乱された。1mほど掘り下げた所で、下部に粘土と砂利を用いた粘土床の一部、およびその周辺で板石を積み重ねた施設を検出した。その他は、埋葬施設の手がかりになるものは残存していなかった。わずかな手がかりから埋葬施設の様子を復元すると、まず墓壇の底に粘土と礫を用いて床を造り、その上に幅0.9m×1m、長さ5mの木棺を据え、さらにその周囲に板石（流紋岩質の石）をある程度の高さまで積み上げて囲まれていたことが考えられる。

## 出土遺物

墳丘からは多量の埴輪が出土したが、その他の土器はごくわずかであった。埋葬施設は擾乱されていたため、もとの位置でみつかった遺物は無いが、土坑内の埋立からつぎの遺物が出土した。

・銅鏡 径22cmの「キ鳳鏡」である。尾ノ上古墳以外では、福岡県沖ノ島遺跡、宮地獄付近などで出土しているが、中国製か日本製かは不明である。

・玉類 斐翠製勾玉(2点)、緑色凝灰岩製管玉(大2点、中7点、小3点) ガラス製小玉(187点)。

まとめ

以上のことから、尾ノ上古墳は古墳時代前期(4世紀代)に築造された古墳(前方後円墳)で、加茂谷地域を治めた有力な首長の墓と考えられる。(福山市文化財年報平成十一年度)

## 井伏鱒二

(いぶせ・ますじ) 小説家 (1898~1993)

福山市加茂町に生まれる。福山中学校(現・福山誠之館

高校)を卒業、初めは画家を志したが、早稲田大学に入學して、文学の道に進んだ。独特の戯画手法を駆使した「山椒魚」「朽助のゐる谷間」などをもって文壇に登場。のち

「ジョン万次郎漂流記」によって直木賞を受賞した。太平洋戦争初期には、陸軍に徴用されてシンガポールに滞在、戦争末期から戦後にかけては、三年間、甲府と郷里に疎開した。戦後は、着実に充実した創作活動によって、次第に文壇で重きをなし、特に、原爆を扱った「黒い雨」によって、その名を内外に高めた。諸作品によって多くの文学賞を受賞し、芸術院会員となり、文化勲章も受けた。井伏文学は、郷土に深く根ざして普遍に達した文学として、日本近代文学史上重要な位置を占める。(福山文学館のホームページより)

## 明治の啓蒙思想家窪田次郎

加茂の谷は、私の一番好きな地域である。この一帯は古くから開けたところで、古くは弥生時代の甕棺が出土し、古

窪田次郎肖像（県立歴史博物館蔵）



莊園になったことと言われている。現在の加茂神社がその名残だ。加茂谷の散策も、加茂神社を起点にするのがよい。神社の前には旧県道が走り、道沿いには昔懐かしい田園風景が残っている。その旧道沿いには、かつての郷土の大先輩の史跡が残っている。特に明治の啓蒙思想家窪田次郎の屋敷跡は是非訪ねて頂きたいポイントの一つだ。加茂神社の前から旧道を北に進むと、やがて大きな石碑の

墳もた  
くさん  
残って  
いる。  
地名の  
起こり  
は、平  
安時代  
に、京  
都の鴨  
神社の

建つ交差点に出る。加茂谷の枝谷「四川」の谷の入り口である。そして、更に進むと左手の小高い丘に古い石垣をめぐらした一角が目につく。これがこの地に土着して600年と言われる、窪田家の屋敷跡である。今はもう誰も住むものはいない。広い屋敷地の右奥に白壁の土蔵がポツンと建っているだけだ。医者にして政治家、教育者、思想家……。明治初年、先覚者として幅広い活躍をした、あの窪田次郎（1834—1902）の生まれ育った家の跡かと思うと、胸に迫るものがある。屋敷の裏手には次郎自身が今も永遠の眠りにについているのだ。窪田次郎については、最近テレビ番組でも紹介され、注目を集めつつある。なにしろ当時草深い農村に過ぎなかった安那郡粟根村（現加茂町粟根）で、明治4（1871）年、「民会」を開催したというのである。それも選挙権は、1戸に1票という、当時としては画期的な選挙制度の議会であった。また、「啓蒙所」という、後の小学校の原型となった庶民教育の場を、全国に先駆けて福山地方に設けたのも彼であった。試みに、「自身出身小学校の歴史を調べて見るといい。昭和40年代

に開学した新設校でなかったら、きっと窪田次郎が提唱し、推進した「啓蒙所」にたどり着くはずである。さらに、その驚くべき先見性は、彼自身の「本業」である医学の分野でも発揮された。なんと、彼は現在でもあまり普及したとは言えない「医薬分業」をあの明治初年、自ら進んで実践したのである。窪田次郎、その「奇跡」としかいいようのない先見性は、いったいどこから生まれたのであろうか。

これからしばらく、彼の足跡をたどりながら考えてみたい。生い立ち 福山を代表する明治の啓蒙思想家窪田次郎は、天保6年(1835)4月24日、備後国安那郡粟根村(現福山市加茂町粟根)で生まれた。今を去ること160年前のことである。父は、蘭方を業とする医師窪田亮貞。幼少の頃、病弱であったという次郎は、この父から大きな影響を受けたようである。次郎の父亮貞は、家運の傾いた窪田家に養子として入って家を継いだ人物である。かつては粟根村の庄屋として繁栄していた窪田家は、この頃ほとんど家産を失い、家屋敷を残すのみとなっていた。亮貞はこの窪田家を医師として再興しようとした。そして、その師に

選んだのが、当時長崎鳴滝で塾を開いていたドイツ人医師シーボルトである。シーボルトについては、言うまでもないことであるが、日本に初めて体系的な西洋医学を紹介した人物である。その弟子には、後に日本の医学界はおろか、各界で活躍した人物は多い。次郎の先見性は、シーボルトの鳴滝塾という、当時日本で唯一開かれていた近代科学の「窓」で学んだ父亮貞の存在が大きいのである。幼少から西洋の学問や思想に触れていた次郎は、少年期から師を求めて各地を遊学している。「窪田次郎履歴書」によると、漢学の師は、有名な阪谷朗廬。備中築瀬の出身で後に井原に興讓館を開いた人物である。近代思想を啓蒙した思想家の最初の師が漢学者というのも妙な話だが、これは当時一般的なことで驚くにあたらない。明治の偉大な思想家は、皆有名な漢学者について学問を始めており、かつ、当時西洋の書物は皆漢文に翻訳されて日本に紹介されており、漢学の素養が無ければ西洋の学問に触れるのはほとんど不可能であったためである。蘭方医学の方は、初め同じく備中築瀬の山成好齋に学び、後には京都・大阪方面に遊学し

て、有名な緒方洪庵門下の俊才、緒方郁蔵・赤沢寛輔・村上代三郎といった著名な蘭学者について修行、大いに見聞を広めている。緒方洪庵については、シーボルトの鳴滝塾同様、言うまでもないであろう。彼の開いた適塾からは、福沢諭吉・大村益次郎を始め、後の日本を背負って立った人物を輩出した所である。窪田次郎は、後年、その履歴書のなかで、「都合八年五ヶ月間医術に従事すといえども、数々窮乏を以て研究の時間は僅々五分の一に足らず」と言つて謙遜しているが、彼の思想を理解するためには、次郎が適塾の流れを汲む人物について、西洋の学問・思想を学んだことを忘れてはならない。

啓蒙所 文久2年(1862)、父亮貞の引退によって故郷に帰つた次郎は、明治維新を迎えると、堰を切つたように活動を開始した。そのはじめが小学校の前身として知られる「啓蒙所」の開設運動である。彼には独特の信念があった。それは人間が人間らしくあるためには、「衛生」「資産」「品性」の三つが必要であるということである。「衛生」とは、現在で言えば「健康」のことである。医師であつた

次郎は健康の大切さを痛切に感じていた。そして、その獲得には何よりも「資産」つまり、「お金」が必要であると考えた。この辺りがこの時期の思想家として彼独自の考えで、医師を出発点とした窪田次郎らしい思想と言える。では「資産」の獲得には何が必要か。「品性」、すなわち「教育」が必要だと、彼は主張する。ここが儒教イデオロギーのみを教育の目的として主張した前代の儒学者と大いに違ふ点である。次郎は自らの信念である教育の普及を最初福山藩の藩校である「誠之館」の改革で果たそうとした。しかし、彼の考えは藩当局に容れられなかつた。そこで彼が考え出したのが民間で「啓蒙社」を組織し、その資金によつて「啓蒙所」を開設しようとする運動であつた。彼は言う、「貧富を分たず、男女七歳以上十歳に至る迄、此の啓蒙所に入れ、容儀を教え、其才知を実地に培養せば、【略】其中必ず国家有用の材もこれ有るべし、【略】朝に英俊満ち、野に遺材なく、賢者位に有り、能者職に有り、また、何ぞ外侮を患へんや」(啓蒙社大意)、言うまでもなくこれは明治新政府の「国民皆教育」の理念を先取りした



ものである。そして、次郎は人々に訴えかけた。「志有る人は、或いは古衣一枚を売り、或いは寝酒一勺を減じ」子弟の教育に当たろうではないかと。彼の努力は広範な民衆の支持を得て、実を結んでいった。明治4年(1871)2月6日、深津郡深津村長尾寺(現福山市西深津町)に最初の啓蒙所が開かれたのを手始めに、各地でその開設が相次ぎ、明治5年(1872)8月3日のいわゆる「学制発布」の時点では、83カ所、通学生5,095人。明治新政府の役人をして、「啓蒙所は文部省も聊か先手をうたれた」とうならせることになるのである。

小田県蛙鳴群 私と窪田次郎の出会い、20年あまり前にさかのぼる。神辺に光蓮寺という寺があって、ここで彼の書いた「奉矢野権令書」の写しを見たのが始まりである。最初手に取ったときは、正直言つてその価値がわからなかった。「大して古くない文書だな、明治時代のものかな」とただ漠然と思っただけである。その後、窪田次郎のことに関心を持つようになってその価値と、何故神辺の光蓮寺にその写しがあったのかわかるようになった。

「奉矢野権令書」は、明治7年(1874)7月、窪田次郎が時の小田県権令矢野光儀に宛てて「小田県議會」の開催を要請した建白書であり、その開催運動の中心になった「小田県蛙鳴群〔あめいぐん〕」の学習会の会場が、神辺の光蓮寺であったのだ。

窪田次郎は、民主的な議會制度に関しても先覚者であった。明治4年(1871)と言う、全国的に見ても早い時期に、次郎の提唱によって彼の住む粟根村では「民会」が開催され、村の収支決算が討議されている。また、翌年には、「下院議員結構の議案」が彼の手によって書き上げられている。

彼の構想した議會制度は、男女に関わらず「一家に一票」という極めて民主的な選挙で選ばれた議員が、「村会」「郡会」「県会」「国会」の4段階にわたって国政を議すという極めて斬新なもので、その県会開設の要望書が最初に述べた「奉矢野権令書」であったのだ。

「衛生・資産・品性」の獲得こそ人間の人間たる所以と考へた彼にとって、明治新政府の「富国強兵」政策は我慢

のならないものであった。彼はその手紙でいっている、「いわゆる富国と申すは、政府に金穀の集まり候者にては決してこれなく、國中皆富候を誠の富国と申し候……」

次郎が明治新政府の政策と真つ向から対立したのは明治6年から始まった「地租改正」である。地租改正は江戸時代までの現物年貢を改め、土地の地価を定め、その3パーセントを税金として徴収しようとした税制改革で、明治大正と多くの農民が小作農に転落して、苦勞するものになった政策である。現物年貢時代は、凶作の場合年貢がある程度減免された、しかし、金納になれば豊凶にかかわらず税金は納めなければならない。日本が近代国家に脱皮するために必要とされた税制改革であったとは言え、これだけでだけの勤勉な農民が呻吟したことか。

しかし、窪田次郎の地租改正反対闘争は、列強に追いつけ追い越せの富国強兵政策を強行する明治新政府の容れるところではなかった。「錦の御旗」を掲げる政府によって次郎の運動は弾圧され、彼自身も医師の免許を取り上げられ、岡山の偶居で寂しく客死することになるのである。

## 志川滝山城跡

福山市の中心から、国道一八二号線を北へ約三〇分、車は吉備高原に刻まれた加茂の谷あいに入る。ここでさらに道を山野方面にとると、やがて加茂町大字粟根に至る。備後宮氏最後の拠点となった志川（四川）滝山城跡は、ここから西に入った四川谷の最奥部に存在する。

城は、吉備高原の南縁の溺れ谷に望む尾根の突端部を利用して築かれたもので、標高三九五メートルの山頂部に南北三曲輪からなる主郭を築き、東南に張り出したほぼ同じ高さの尾根上に四曲輪を配している。主郭背後の尾根上と、主郭と東南の曲輪群の間には堀切が見られるが、加工の度合いはあまり強くない。主郭部と東南の尾根上の曲輪群に挟まれた東側のくぼ地には石垣で構築された井戸曲輪が残り、主郭西の断崖面には城名の起こりとなった、降雨後のみに流れ落ちる枯れ滝がある。

江戸時代の郷土史書『西備名区』によると、滝山城は、山野村（現福山市山野町）戸屋ケ丸城主であった宮三郎義



毛利元就隆二元連署感状

惣領かその一門に連なる者であらう。

この城が攻防の舞台となったのは、天文二十一年（一五五二）夏のことである。前年九月の大内義隆滅亡後の政情のなかで、同年四月、將軍足利義輝は、出雲の尼子晴久を備後など八力国の守護職に任命し、中国地方の安定勢力と

兼が明応元年（一四九二）に築き、越後入道光音、常陸守光寄と三代にわたって居城としたという。

義兼の系譜は明らかではないが、山野は

室町時代初期、宮氏の有力な一族宮次郎右衛門尉氏兼が領しており（『山内首藤家文

書』八三号）、氏兼を祖とする宮彦次郎家の

認められた。これによって尼子の勢力は再び中国山脈を超えて備後に南下し、庄原の山内氏をはじめ、これに応ずる者が現れた。なかでも宮入道光音を盟主とした宮一族は、一族を糾合して備北から南下し、滝山城に拠って宮氏再興の旗を挙げた。宮氏は、天文年間、尼子氏に味方して大内、毛利氏の攻撃を受け、備後南部でほとんど勢力を失っており、この機会に失地を回復しようとしたのである。

宮氏の挙兵に対し、大内氏の実権を握った陶晴賢から、芸備地方の軍事指揮権を与えられていた毛利元就は、芸備の国人衆に激を飛ばして、大軍を備後南部に向けた。合戦は、七月二十三日に行なわれ、籠城将士の奮闘も空しく、城は陥って光音は備中に逃走した（『陰徳太平記』巻十八など）。『毛利家文書』二九三号などによると、高所を占める城方は、さかんに飛礮を用いて抵抗したが、この城の弱点となっていた「尾首（西北峰続き）」の城壁を突破されると、持ちこたえられず、一挙に勝敗が決まったようである。

## 加茂神社

福山市加茂町芦原

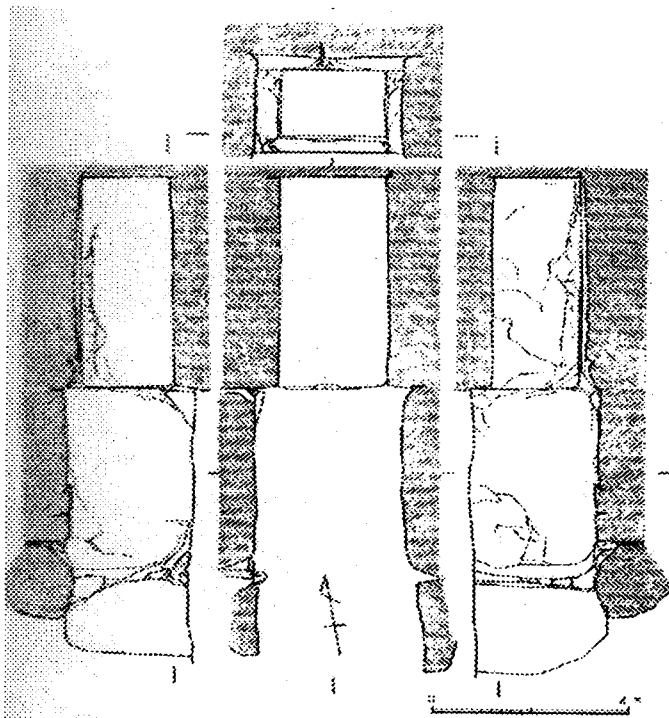
中国準平原の山地から加茂谷に流れ下る加茂川の西岸にあり、古墳群のある加茂山を背に、前に宮の馬場・神池を配し、社叢に覆われる。旧郷社。別当寺として神宮寺があった。「西備名区」は「日本武尊、穴の悪神を誅し給ひし時、(中略)此所に至りて彼悪神を誅し給ひし跡」とし、祭神は二ニギ尊・神日本磐余彦尊・玉依姫命・賀茂建角身命とする。社伝によれば貞観六年(八六四)京都賀茂神社(上賀茂神社)の分霊を勧請したといひ(郷社賀茂神社御由緒)社蔵)、当社付近には加茂川・加茂山のほか、加茂川に沿って貴船神社、芦原の東部に高雄山、字名に糺の森・岩倉・芹生など京都との関連をうかがわせる地名が多い。加茂谷周辺には多くの古墳群があり、古くより繁栄した地域で、賀茂氏が移住して開発した土地とも考えられ、いずれにしても古代より存在した神社で、加茂の「大宮」とよばれて近郷の崇敬を受けている。社家石井氏ならびに神宮寺に古記録があり、芦原が幕府領時代には石見大森代

官、嘉永(一八四八〜五四)以後は福山藩主阿部正弘により祈願所に定められ、とくに安政三年(一八五六)の大干害の際は代参寺社奉行に雨乞の祈構が修せられている。

## 猪の子一号古墳

位置 福山市加茂町下加茂猪の子。

概要 加茂の谷は西麓に小規模ながら古墳群が連なり、古墳密集地域の一角を占める。本古墳は東にのびた丘陵の先端で、この谷を見おろす小高い所に築かれている。現在、江木神社の境内に位置し、神社の敷地造成時の削平と土盛りにより、墳丘の形態は明らかにしがたい。しかし、周辺の地形から方墳または円墳のいずれか、方墳であれば一辺1.4m、高さ3mくらいの規模と推定される。埋葬施設は南に開口する横口式石槨に羨道を取り付けたものである。石槨部は入口を除く5面が残存し、いずれも花崗岩の切石各1枚で組合わせている。石材の接合部には組合せのための加工が施され、左壁と床石は端部を斜めに削って合わせ、右壁と床石、奥壁は右壁を幅2cm、5cm彫り込



△横石式石室断面図（『遺跡』第2巻より）  
左右列石を意図して構築されている。

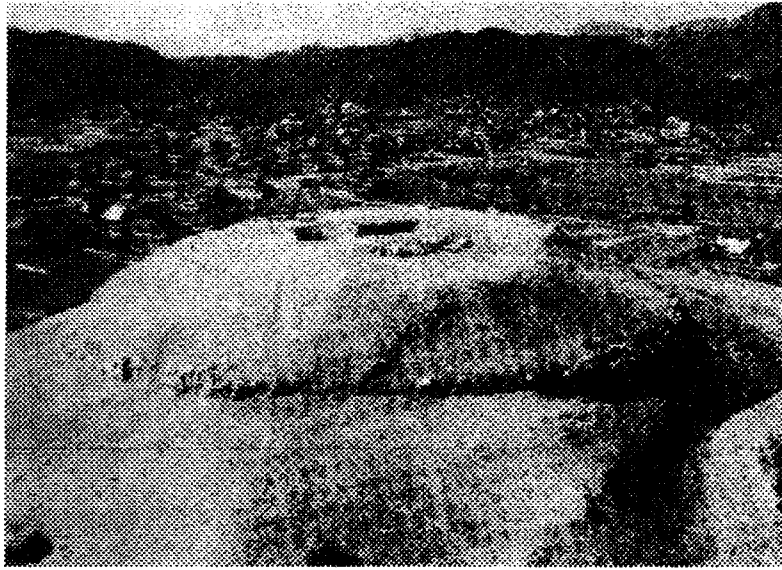
み、床石、奥壁をはめ込んでいる。天井石と各壁との間隙に漆喰がみられる。内法は長さ2.82m、幅1.09m、高さ0.89、0.95mを測る。羨道部は側壁、天井石

とも2枚の花崗岩を使用し、奥側はいずれも大きな切石で、手前の側壁は幅の狭い割石を立てている。羨道の大きさは長さ3.63―3.84m、幅1.46―1.70m、現高1.25mで、右壁が長く、幅も入口側で広がっている。石槨部と羨道部の接合面は、天井石はほぼ垂直で、側壁は石槨部の両側壁にL型の段彫りがなされ、これにはめ込まれている。本古墳は古くから開口し、遺物については明らかでない。古墳の築造年代は埋葬施設の構造から7世紀後半に位置づけられよう。なお、西25mの近距離には、天井石を失った長さ約5m、幅1.5mの横穴式石室があり、本古墳との関係が注目される。（篠原）

## 石鎚山古墳群

位置 福山市加茂町上加茂片側。

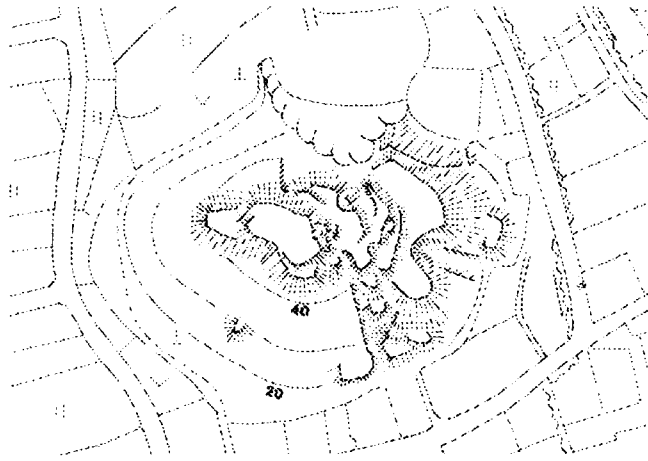
概要 加茂川の沖積作用によって形成された加茂平野の南端にあたる片側の低丘陵上（標高約63m）に位置し、2基が隣接している。現地は福山市街から北へ約15km、新国道182号線添いにあり、丁度、加茂平野と神辺平野



が接する開けた位置にあたる。このため、古墳群からは加茂、神辺両平野を一望のもとにのぞみ、谷をはさんで対面する北方の低丘陵群中には掛迫6号古墳や猪

の子古墳を眺望することができる。1号古墳は丘陵先端に営まれた径20m、現存高3mを測る円墳であるが、墳丘は花崗岩の特有の地形である自然の円頂丘を削り出して形成した墳丘基盤上に盛土を厚く重ねてつくられたものである。特に墳丘は裾部と中腹に花崗岩の角礫を使用して列石がめぐらせてあり、一見、2段築成を思わせる特異な外観を有している。主体部は2基があり、いずれも竪穴式石室であるが、中心主体と考えられる第1号主体部（内法2.8×1m）には長さ7.5m、深さ1mに及ぶ排水溝が付設されている。石室内部からはほぼ完存する壮年の男性人骨一体と共に、船載の斜線二神二獣鏡、翡翠製の異形勾玉を含む装身具類47、鉄製品3が出土している。他に石室土壙外から鉄鍬14がまとまって出土している。第2号主体部（内法2.5×0.7m）は内部に割竹型木棺を納めたと考えられるもので、中から琥珀の勾玉一を含むものの、銅鍬5、鉄鍬27、鉄剣1、刀子一といった武器を主体とした副葬品が出土している。

## 正戸山城跡 福山市御幸町



南北朝の内乱は、日本史上でも重要な出来事でした。今までわずかに余命を保っていた古代勢力はこの戦乱で最終的に勢力を失い、本格的な武士の世の中が始まるのです。また、この時代になると国人と呼ばれた在地武士の動きも活発となり、福山地方の歴史

も次第に明らかになってきます。

そうした中で、武士達の争奪の的になった山城がありました。それが御幸町の正戸山【しょうとやま】城跡です。

この城は、“備後の穀倉”神辺平野のほぼ中央に位置する独立丘で、南麓に旧山陽道が通り、現在では平野に孤立する小丘にしか過ぎませんが、当時は周囲は“沼”であったと伝え、戦略的な要衝を占めた、正に天然の要害と言えるものでした。

江戸時代の地誌によりますと、この城は小藤備前守が築き、ために小藤山【しょうとうやま】と呼ばれたと伝えられています。上に現れるのは、北朝方の備後守護岩松頼宥【いわまつらいゆう】の居城としてでした。

岩松氏は、新田義貞の一族で、上野国【群馬県】の武士でしたが、南北朝の内乱では義貞と袂を分かち、足利尊氏の忠実な部下として活躍しました。

彼が備後にやってきたのは、その頃備後に勢力を持っていた守護上杉氏の力を押さえ込むためでした。守護を押さえるために守護を派遣するというのも妙な話ですが、当時、

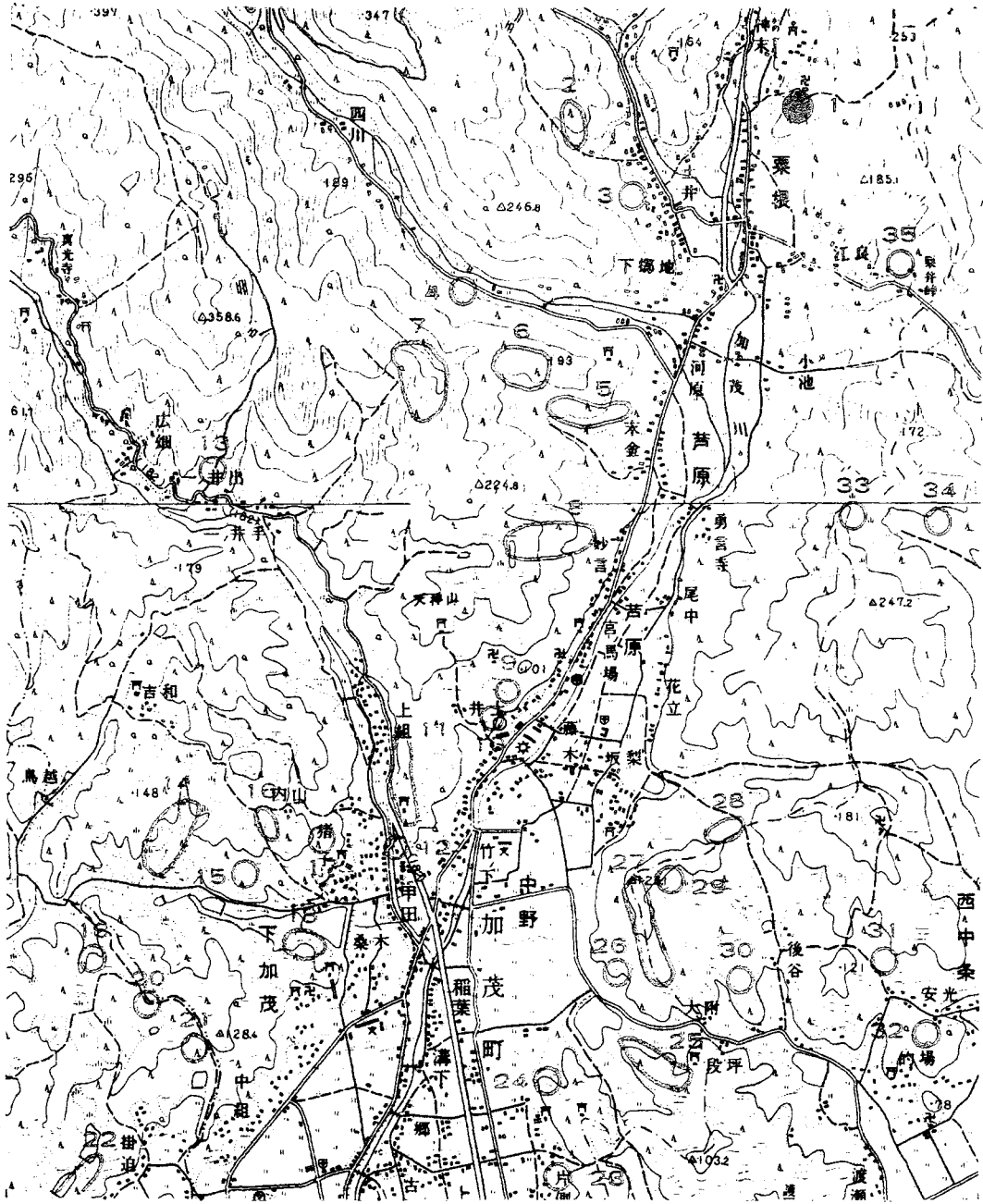
戦乱は南北兩朝の抗争よりも尊氏・直義兄弟の権力闘争の方が熾烈を極め、直義に味方した上杉氏に対して、尊氏から派遣されたのが岩松頼宥だったのです。時に観応2年

【1349】8月のことでした。

正戸山【当時は勝戸と書いた】に本拠を置いた頼宥は早速活動を開始します。その直後、8月13日には石成上下城による上杉氏の軍勢を破り、同月22日には尾道城に拠る直義方と戦っています。しかし、上杉氏の反撃も中々鋭いものがあつたようで、同年10月には正戸山城も攻撃を受け、味方の奮戦によってやっと撃退しています。

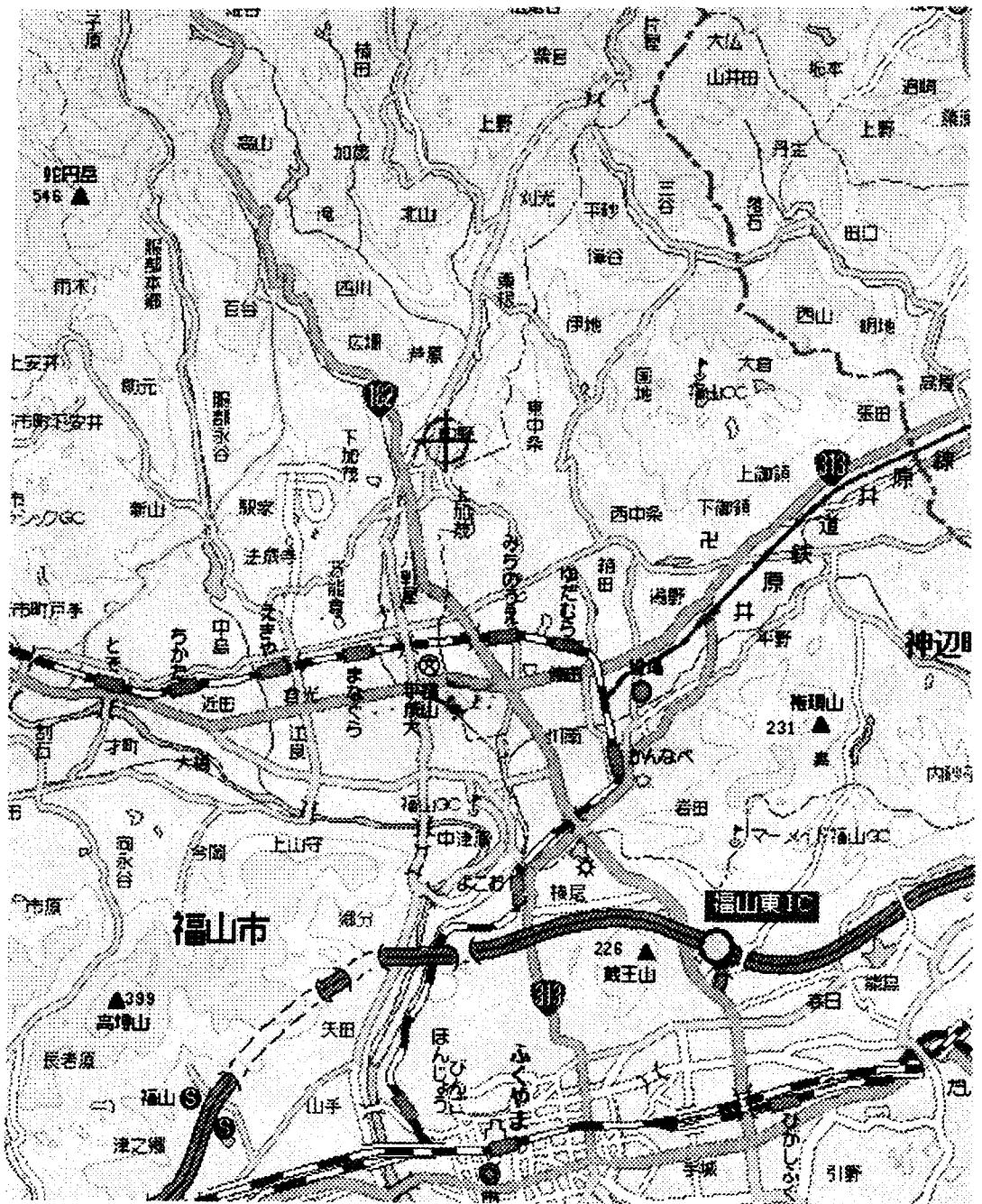
結局、この戦いは尊氏方の勝利に終わり、頼宥は備後を去って行きましたが、この城の役割は終わらず、以後250年、戦国時代の終わりまで地域の拠点として興亡を繰り返すのです。





第1図 周辺遺跡分布図 (1:25000)

- |            |           |             |           |          |
|------------|-----------|-------------|-----------|----------|
| 1 尾ノ上遺跡    | 2 土井古墳群   | 3 下郷地遺跡     | 4 青塚古墳群   | 5 永久地古墳群 |
| 6 永久地奥古墳群  | 7 落石古墳群   | 8 妙言古墳群     | 9 法光寺跡    | 10 井上遺跡  |
| 11 上組古墳群   | 12 岡遺跡    | 13 一ノ井手古墳群  | 14 倉田古墳群  | 15 倉田遺跡  |
| 16 内山古墳群   | 17 猪の子古墳群 | 18 正福寺奥山古墳群 | 19 長石古墳   | 20 粟塚古墳群 |
| 21 草広古墳群   | 22 掛迫古墳群  | 23 竜王山遺跡    | 24 石鎚山古墳群 | 25 吹越古墳群 |
| 26 池ノ向製鉄遺跡 | 27 中野古墳群  | 28 中野北古墳群   | 29 大附古墳   | 30 段坪古墳  |
| 31 安光古墳群   | 32 猫山古墳   | 33 小野古墳     | 34 おうち古墳  | 35 江良古墳群 |



1) Alps Mapping K.K. All Rights Reserved.  
 2) CyberMap Japan Corp. All Rights Reserved.

編集・発行 **備陽史探訪の会**  
 〒720-0824 福山市多治米町 5-19-8  
 電話 (084) 953-6215